

発行/平成2年4月15日 No.16
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 16

特集 暮らしからの地域賛歌

○愛すべき狭谷型山村「肱川」

坂根 修…2

○北条の軽井沢は… 山崎 幹敏…4

○我が町小田町 岡田 行雄…6

○お茶とあじさいの里づくり

大西 博子…8

○ふるさとに対して私が行っている

こと 山本 吉昭…10

○“学んで二年…根なし草のたれ言”

編集事務局…12

研修レホ

出番の少ない雪吊りの国……………14

フードピア金沢'90から

・まちづくり総合センター 人事消息

…16

REPORT

・元気印レポート

レインボーノ伯方町……………17

・地域づくり 学んで三年 よもやま話

ノート ……18

研究会議 News Letter

'90えひめ地域づくり活動者集会

報告 ……20

MESSAGE

あなたのコーナー……………30

TOWN タウン パソコン通信 ……31



「肱川」山村型谷狭すべき愛

修 根 坂 肱川町



美男(自称)の
坂根さん。

(ブラジル移住)

東京に生まれて東京に育ち、広大な農業に憧れてブラジルに渡ったのが二十才の時である。当時のブラジルはいまより遥かに遠く、大学を中退して百姓になるなどとは狂気の沙汰であった。

ブラジルの十年は辛苦の限りを尽した歳月で、自ら望んで舐めた苦労だっただけに貴重なものであった。貴重だったなどと言えるようになったのも最近のこと、帰国してから一度々、再び移民船に乗り「シマッタ」という夢で目を覚すことが

しよっちゅうだった。

しかし、自ら望んで底の底まで落ちてゼロからの出発を得たことは大きな財産であって、そこから強さ・発想・思考などが今迄の慣習にとらわれることなく発揮できるような気がする。

(皆 農 塾)

埼玉県寄居町に入って百姓になったのはサラリーマン生活を二年経験した後だった。資金も農地も労働力もない自分が、やっと一反歩の農地を手に入れて自立したのが三十二才。食えないと言われる農業で、しかも一反歩の面積で食っていたのは平飼養鶏だった。その頃に書いた「都市生活者のための、ほどほどに食っていける百姓入門」という長たらしい題名の拙著は好評を博し、都会の百姓志願者が沢山集まってきた。

集まってきた人達によって、こは農場経営のかたわら農業研修所として活動し、ここから多くの新しい百姓が巣立っていった。「皆農塾」と名付けられたこの

農場は研修生という労働力に助けられ、無農薬野菜の生産販売を手びろく経営し、企業的だという批判を受けるほどに拡大していった。このことを書いたものが「痛快、気ばらし世直し、百姓の塾」だった。

(必要になったブレーキ)

皆農塾が発展すればするほどに私の心の中には隙間風が吹くようになってきた。私は研修生を育てるのに、まず研修生の自立心を考えるので、なるべく私が出さないように心掛けていた。種を蒔いたことがない、鋤を握ったこともない。そういう人達を一年間で食える百姓にするのだから教え方も少々変っている。したがって私は段々に土から離れていき隠居の様な生活になってきてしまった。

また、農場の発展は即ち経済的な発展であって、本来発展というのは自給自足に少しでも近づくというものだと考えていた自分に大きな隔たりができてきた。しかし人間の業と言うべきか、発展は止



著 書

まることを知らず、もはや後戻りが不可能と考えるようになり、自らブレーキをかけられないなら環境を変えてでもブレーキをかけるよりしかたがないと思った。

(山間の過疎地、肱川に入る)

肱川町の職員が皆農塾に研修に来て帰り際に「卒業生を送ってもらえないか」という話があった。その話に乗り気になった研修生の一人に、私は金魚の糞のようについで初めて肱川を訪れた。この肱川町は人口三千六百人。平地の少ない地で、この様な地域を「狭谷型山村」と言うのだそうである。いかにも怖そうな名称である。視察を終えて埼玉に帰るとメンバー達は口々に「どうだった」と

放し飼いの鶏



肱川の印象を尋ねた。私は「あそこは人間の住むような所ではないよ。傾斜地ばかりで平らな所がない。立っているだけで一苦労だよ。」そう言いながら私は、埼玉の皆農塾をスタッフに譲って、肱川に移住する決心を固めていた。

あのような地ならばこそ、規模拡大に走ることなく、農業を楽しんで生活することができ。自分でかけられないブレーキを、あの自然がかけてくれる。そういう思いに心を熱くしたのである。

（農業の楽しみと経営の楽しみ）
平地での農業は、考えてみれば余りにも単純だった。私の農業遍

歴はブラジルの大平原、関東地方の平野と常に平らな所でのものだった。平らな所での農業はその安易さから心ならずも効率を追いかける農業に陥いるものである。効率を追いかければ農業の楽しみが失われ、その分経営の楽しみを得る。しかし、経営の楽しみなら農業の分野でなく工業の分野を選択した方がはるかに有利だという思いが私にはある。

根本的には経営の楽しみより農業の楽しみの方が上だと思ってい

るので、効率を追いかけてしまう平地での農業は、農業の楽しみを失わせる危険が存在することになる。したがってこの狭谷型山村という肱川町は、私にとって行き着いた最後のパラダイスなのである。

（百姓は城造り）

平野部の一町歩は無味乾燥なものである。しかし山間地の一町歩は違う。山あり谷あり平野ありの起伏に富んでいる。絵になる地形がそこにあり、私は農業から夢を取ってしまったのは農業が成り立た

ないと思っているので、ここ肱川町は夢の地形と言うことができる。

平らでないと農業ができないと思っている人は、この効率社会に毒されてしまっている人である。沢山作って、大量に市場に農産物を出荷し、その挙句が価格の暴落をまねき、安価だから夜も寝ずにもっと大きな面積で働かなくてはと思う。こういう百姓は救われない。

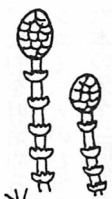
私はこの愛すべき肱川町の地形で、比較的平らな所では無農薬で野菜を作ろうと思っている。無農薬野菜は規模が大きくなるとコツソリと農薬を使わなくてはならなくなる。規模が小さな平らは歓迎すべきところである。

急な傾斜地はどうにもならない。ここでは栗やユズ等を植えようと思っている。秋になって収穫されるこれらの果樹は私達のボーナスである。

比較的平らなところ、でも野菜作りには急すぎる場所には鶏を飼う。鶏は栗林の中に放され、産む卵は有精卵である。もちろん飼料

の中には添加物を入れない。

百姓は王
国造り、私は野菜や鶏や栗達の王様である。



（活性化について）

地域は活性化に真剣である。それだけ地方が沈滞しているからかも知れない。しかし「みんなが楽しくなる町づくり」でなくては活性化しない。一部の人が主人公になって行なう活性化は多くの人にとって苦痛であり忍耐させられることになる。

みんなが主役になる活性化は決して華かでないかも知れないが、一人一人が光っているものである。過疎といわれる地域は工場誘致など地形や距離の関係でまなならず、農民一人一人が見事に自立して光ることが本来の活性化である。

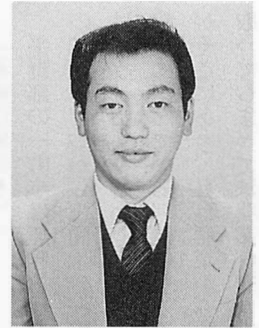
肱川町は、この厳しい自然を背景に見事農業で光ることを目的にいま思考する街である。

北条の軽井沢は…

北条市 山崎 幹 敏

● 猪木ありき

北条市街中心から東へ八キロメートル、標高三百メートル、高縄山の山懐、谷間に家が点在するわが猪木がある。昭和三十年代前半までは、二十数戸あった家も、現在ではわずか六戸、十五人が住むのみとなり、急激に過疎地になってしまった。この背景には、戦後の木材需要に支えられ、豊かであった山村の生活も、昭和三十四年外材の輸入が開始されたこと等によって、木材価格が低迷し、だんだん人々の生活は苦しくなっている。それに反し、国民の生活水準が向上し、いなかの生活を捨てて若者が急増したのである。現在農林業のみで生計をたてている人は少なく、ほ



山崎 幹敏さん

とんどの家庭は兼業農家となっている。

● 四季の風情

はじめに紹介したが、北条市街中心からわずか八キロメートルであるが、四季の変化に富む谷間の集落は秘境の様相を呈するから不思議だ。

春は山々の緑も色鮮やかで美しくツクシ・ワラビ・フキなど豊富で、ピクニックがてら山菜採りにやって来る家族連れが多い。地区の人々は田植えの準備等で忙しい。夏はまさに北条の軽井沢だ。溪流（というほどいたしたものではなくただの谷川）沿いの木影で、ミンミンゼミの声を聞きながらの昼寝は最高だ。日本特有の蒸し暑さを忘れさせる。「生きていて良かった！」とつくづく感じる瞬間

である。

稔りの秋、山栗を拾い秋の味覚に舌鼓を打つ。高縄山の自然林の紅葉はすばらしい。もうすぐ厳しい冬が訪れる。リスの姿を良く見かけるのもこの時季である。

谷間の冬は、雪こそほとんど降らないが寒さは厳しい。人々は寒さに耐えながら、山仕事や春の農作業の準備に忙しい。

● 伝統行事「的射」

ここで地域の伝統行事を紹介しよう。立岩地区には、東予越智郡に共通する年中行事や諸制度などがある。その一つに「的射（弓祈禱）」がある。立岩地区には猪木の他に、米之野と小山田にも弓祈禱があるが、猪木のは変わっているという。

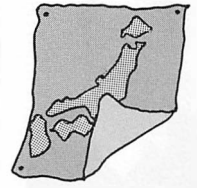
新春を祝い、五穀豊穡と無病息災を祈って正月五、六日の二日間行われる。初日五日午後から「お役者さん」と呼ぶ「オンユミ・メンユミ」二人の射手は会堂に籠って精進し、六日の午後まで帰宅しない。女人禁制で四人の「頭屋」

が食事などの世話をする。二人のお役者さんは、大的（直径約一・六メートル、奉書二十八枚張りの円形で、的の中央にナスの墨を使い藤かずら製の筆で②印を書いたもの）一つと、小的（直径約一メートル、奉書八枚張りの円形で大的同様の方法で＋印を書いたもの）二つを作る。

その後、二人のお役者さんは、羽織、はかまで威儀を正し、河内神社に参拝、的場と呼ばれる田に置いた小的の一つに約三十メートル離れた射場から各々六本の矢を三回射て「三度弓の儀」を終わる。

翌六日、二人のお役者さんは、前日同様羽織、はかまで正装し、神酒を飲み雑煮のもちを六個ずつ食べ射場へ、先ず大的を射るわけであるが、その前に百八本の矢の射数を数えるために使う「矢かず」（二十センチぐらいに切った萱の茎）を頭屋の代表が河内神社に供える。そして、大的を射始める。オンユミ・メンユミ二人のお役者さんが、各々六本の矢を二回射る。その後二人が射場を交替し、また

各々六本の矢を三回射る。この間に、見物の地区民らに



神酒とおこく（ごはん）がふるまわれる。その後、頭屋の代表が矢で大的を破り地区民らはこれを三度ぐり河内神社に参拝し無病息災を祈る。その後、小的を各々六本の矢で三回射て百八本の矢を射終える。

この後、お役者さんの労をねぎらう酒宴がある。先ず、神酒を飲み、雑煮のもち六個ずつを食べたあとで、二合半飯を椀に大高盛りした「カケメシ」を出す。食べ残すとその年は不作になるといわれ、その年の作柄を占うので「カケメシ」と言ったのであろう。この行事は、三百年以上の歴史があると伝えられ、全国的にも珍しい。

● 伝統行事「おしばおさん」

お盆にも珍しい行事がある。

「おしばおさん」と呼ばれるこけむしに墓碑が集落から約一・五キ

ロメートル離れた柴尾山頂にある。

お盆の八月十四日夕刻、地区民らはおしばおさんの境内へ集まって来る。境内へは素足で上がらなければならぬ。変わっているのは精霊柵の上からの流し水で手を清めることである。この精霊柵はサトイモの葉の上にさいの目に切ったナスが乗せてある。かける水にもさいの目に切ったナスが浮かべた。手を清めたあと、精霊柵を支えるニガ竹の小枝をそれぞれが一本ずつ取り持つ。その後、全員でカネと太鼓に合わせて「ナーマイダーブツ、ナーマイダ」と百四十回念仏を行う。この念仏が終わると、それぞれが持っていたニガ竹の小枝を境内の東の隅へ挿し、大念仏を終わる。

ここに葬られているのは、応仁二年高穴城で戦死した柴尾城主越智河内守通富と高手山城主越智甲斐守通誘の二人であると伝えられているが、定かではない。

● 猪木ダイバ

毎年十月十一日に行われ、石段

からみこしを落すことで有名な北条市八反地の国津比古命神社の秋祭りにも、猪木地区民が行う大役がある。それは、みこしの巡行には必ず猪木ダイバと呼ばれる二人が露払いをすることである。

ことのおこりは、北条が風早郷と呼ばれていた頃、この風早を大洪水が襲い、国津比古命神社が海へ流されたそうである。この時、御神体が大浜沖で漁師の網にかかったがどうしても上がらず困りはてていたところへ、青竹を担いだ猪木の人が通りかかり手伝うといとも簡単に御神体を引き上げることができた。そこで必ず秋祭りには青竹を手にした猪木ダイバが出る



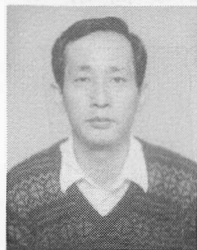
ことになったそうである。

● 地域の伝統を未来に

このように六戸になった現在においても、細々ながら伝統を守り地域に愛着を持って生きている人々がいることを忘れてはならない。しかし、世の変遷は早く、若者は利便性の良い街場へ住むようになり、猪木を去って行く。けれども、年に数回の伝統行事が行われる時には、豊かな自然に恵まれた北条の軽井沢猪木へ帰って来て欲しい。そのためには、豊かな自然とのすばらしい伝統行事を守り続けて行きたいものである。

我が町小田町

小田町 岡田 行雄



岡田 行雄さん

● 深山と銘木の町
町を紹介するならば、やはり林業でしょう。私の住む小田町は、人口五千人足らずの小さな町です。山に囲まれた、緑あふれる林業の町、都会の人達からみれば山の中の静かな不便な町に映るかも知れませんが、私には日本が一番の住み良い町だと思っています。町民皆んな温和な性格で、都会の人達のように気忙しくありません。田舎の人の欠点かも知れませんが、本当にのんびりとしていい町です。私はこのような生活が好きです。

特に小田町の磨き丸太、ログハウスは、有名です。ログハウスは丸木を組み立てた森の香りあふれる「ウッドデハウス」で、個人住宅、別荘、ペンション、保養施設にと、住む人のニーズに合わせて設計されている注文住宅です。今では注文が多く生産がまにあわない状態です。

観光では、四国カルスト「小田深山」でしょう。夏は、涼しい避暑地として、別荘、キャンプと、秋は、紅葉、冬は、スキーと四季おりおりの観光が楽しめます。小田名物たらいうどん、アメノ魚の土手焼、山菜料理が食べられます。ぜひご家族、友達とお越し下さい。

私達の町では、若いものから老年寄りまでスポーツが大変盛んに行われています。二月の卓球大会、五月の母の日のバレー大会、十月の町内球技大会と、そして十一月には、地区の運動会などが各公民館の主催で行われています。特に十月の球技大会は、お年寄りはクローケー、女の人たちはバレー、そして男達はソフトが行われています。

ます。各種目とも年齢別、クラス別に行われ大勢の人の参加があります。昼食は、婦人会の作ったおにぎりをつつき、夜は、地区別に反省会、お酒を飲みながら楽しい一日の締めくくりをします。太会には町民千人以上の参加があります。

● 火祭り、

そしてふれあい

イベントとしては、

銘木祭り、農業祭り、文化祭、灯籠祭りそして山の神の火祭りがあります。私の住んでいる寺村地区の山の神の火祭りについて少し説明したいと思います。この祭りは、県の無形文化財にも指定されております。山の神を祭る火祭りの行事は、文政六年（一八二三）に始まり、一七〇年近くも続いています。火祭りは旧暦の七月二〇日に寺村地区六班が輪番で行っています。当番は十五名で、その代



「さなぎ会」の勉強会

表を「宿」といい、連絡係りを「フレカタ」と呼び、火のことを「オヒカリ」というなど、昔のままの呼び名で受け継がれています。夕方になると、六角山の真下の参道となる田んぼの畦道に、たいまつに火をつけて、一〇八灯の「オヒカリ」を上げます。火祭りの由来は、

火をともして山の神を迎え、山の幸と、秋の豊作を祈ったものと言われていています。昭和五十二年から、火祭りの行事を八月十五日のお盆に行うことになり、「オヒカリ」の数は一〇八灯が基本でしたが、最近では火文字を作るために、三〇〇〇灯をこえるようになりました。この夜景は、大変美しいものです。今では、各班から三名が選ばれ「火祭り保存会」が組織され行事の計画が練られます。「オヒカリ」は当番が行い、カラオケ大会は公民館、盆

「火の祭典」



山の神の火まつり(8月15日)

燈籠まつり

踊りは青年団、夜市は若い仲間達、花火は保存会と皆んなで行っています。私も毎年参加しています。半年前から色々と計画準備し、当日前後は一日中かかります。一番心配なのは天候です。ここ十三年間には、一回延期がありました。しかし、夏のことなので再々夕立が来るため三〇〇余りの「オヒカリ」にあわててナイロンを被せに何度走ったことでしょう。夜市のほうでも、天候に左右されるた

め材料の仕入れに頭をいためます。火祭りをお盆の十五日に決めてからは、帰省客の関係から一日延びると人の出足も少なくなってしまう。田舎には、お盆に帰ってきて何も楽しみがありません。しかし、火祭りを始めてからはみんな楽しみができました。火祭りを見に行けば、懐かしい友達に会えるからです。あちらこちらで輪ができ、昔話や現況を話し合っている姿をよくみかけます。時々、

何んでお盆のこの時期にこんな苦勞をしなくてはいけないのだろうかと思うことがあります。しかし、大勢の 사람들이山手に見える三〇〇灯の「オヒカリ」の幻想的な夜景を見て、喜び感激してもらうことで、私達の苦勞も嬉しさに変わります。そして、来年も頑張ろうとファイトが沸いてきます。是非、皆さんも一度見に来て下さい。

● 住むなら小田町

私は、済生会小田病院に勤務しています。病院にいて特に独居老人、老人家庭の多いことに気がつきます。小田町は老人人口の比率がとても高いほうです。老人にとって小田町を離れないのは、生まれた土地だから、都会の生活は嫌だからばかりではないと思います。皆んなこの小田町が好きなのだと思います。私も一生この町を離れたくないと思っています。

都会に住んでいる人達に呼びかけたい。小田町にきて生活をしませんか。定年になって退職金で家を建てるのなら小田町にきて下さい。都会の三分の一で家が建ちます。そして、小さな畑でも買って

手作りの野菜でも作りませんか。緑に囲まれた静かな公害のない町で、人間らしい生活をして下さい。松山へ一時間、東京へは飛行機で二時間で行けます。私は、Ｕターン組で都会の生活をしてきた一人として皆さんに呼びかけたい。そして、私の夢は、この小田町に「老人憩いのセンター」を造ることです。二年後には、特別老人センターが出来ます。老人団地、特別老人センター、済生会病院と、老人が一生安心して暮らせる町になったらと思っています。

● はばたく蝶に：

私は、現在若い仲間達と「地域づくり」研究会を作って頑張っています。みんなでこの小田町をいかに住み良い活気のある町にするか、毎月一回勉強会を開いています。会の名前は「さなぎ会」といい、将来「蝶」になってはばたきたい」と夢をもって付けました。今後とも頑張って住み良い町づくりのために勉強をしていきたいと思っています。

最後に、外から見た小田町の感想をお聞かせ下さい。そして、こうあってほしい、こうしてはどうかなどのアドバイス戴ければたいへん嬉しく思います。

△連絡先▽

上浮穴郡小田町大字町村

済生会小田病院内

岡田 行雄

お茶とあじさいの里づくり…

新宮村 大西博子

私の住む新宮村は、川之江駅から車で三

〇分、香川・徳島・

高知へとどの県へも

すぐに行ける四国のおへそのような所で

す。十年前嫁いでき

た時、三千人余りい

た村の人口は、現在

二千人余りとなり、

過疎化が進んでいま

す。小さな棚田があ

る程度ではとんどの

家は、畑でお茶を栽

培しています。最近

では現金収入を求め

て村内にある縫製工

場・冷凍食品会社・

土建屋さんへ、また

川之江・三島の製紙

工場へと、ほとんど

の人が勤めに出てい

ます。家族は高血圧

で療養中の父と母、

九十四才の祖父そし

て私達夫婦と三人の

子供の八人家族で、

茶園八〇アール・山林八ヘクターの経営をしております。

●無農薬栽培に賭ける

新宮の茶畑は点在しているせい

か天敵が多く、病害虫が少ないし、

それが広がりにくいという地のり

を生かして、個性化商品を作ろう

と無農薬、有機栽培に

切りかえ、摘採は

二番茶までと

しています

す。何よ

りも土づ

くりが大

切だとい

うので牛

糞と草を混ぜ

て堆肥をつくり除

草剤は一切使用しませ

ん。今消費者のあいだでは、無農

薬ということに関心が高まり話題

になっているようです。

先日川之江での「ふるさと作り

大会」に於いて、大阪しろきた市

民生協専務理事さんによる「農へ

期待すること」都市生活の立場か

らという演題の講演を聴きました。輸入食料品のことからはじまり、

無農薬食品を契約栽培してもらっ

ている等というお話でした。主人

が発表したあとだった為、お茶の

ことも多々話していただき、聴い

ていた人達には反響があったと思

います。私も消費者からの直接の

声を聞き、とっても参

考になり、又心強

くなり嬉しく

思いまし

た。昨年

九月全国

農業新聞

に掲載し

ていただ

いた時、遠く

は青森からの注文

もあり少しづつですが

他県からの注文を受けています。

今治へ第二・四日曜日の午前中母

の作ったこんにゃくをはじめ、し

いたけ、草団子、近所の野菜等も

あずかって即売に行きます。

私達無農薬・有機栽培にこだわっ

て八年目、やっと作柄が安定し固

定客もできつつあり、光が明るい感じがしています。他産地とのブレンド商品でなく、山々に囲まれ空気の澄んだ新宮村での新宮茶作りに頑張りたいと思います。

●あじさいによる里づくり

母は元のお茶のみ生活改善グルー

プのリーダー、主人は四日クラブ

のOBで中核農業者組織の世話役

私はPTAの副会長と愛護班の班

長をしており、忙しい中を三人が

三様に、時間を工面して仲間との

輪を広げております。お蔭で父が

倒れた時や農繁期には、四日クラ

ブ員や近所の方々にずい分助けて

いただきました。ありがたいこと

とつくづく思います。青年農業者

の茶摘み体験交流会や幼稚園児の

茶摘み等もあり、わが家とわが茶

園は千客万来で賑やかなことです。

昨年からオーナーを募集して、ま

だ小人数ですが会員もできました。

生活改善グループの歴史は古く、

中でもあじさいの植栽は快挙であっ

たと思います。私達の住む中野地

区に農道がついたのは四十八年で



す。待ちに待った道路がここまでのびてくるのに十年かかっているのです、その喜びは一入だったようです。嬉しい気持ちを表現しようと、地区の入口から二キロ程度の道筋にあじさいを植えたのです。

そのあじさいも十六年、グループ員の手入れの良さと土地柄も合ったのでしょいか。大きな株になり見事な花を咲かせました。このあじさいロードを昨年新聞で紹介していただき、遠くは松山をはじめとして西条・新居浜方面から沢山の人が見に来てくれました。母と私はあじさいに因んで花の形をしたおまんじゅうを作り七月二日雨の降る中グループの方々でお茶を出して一息ついていただきました。

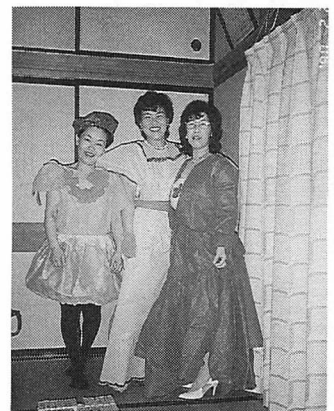
お客様に子供と一緒に写真を写していただいたり、キャベツの一つでもと手渡すと、写真とお礼の手紙「来年も楽しみにして行きます。」を数人からいただきました。



グループは高齢化したため存続がむづかしくなったということですが、昨年解散しました。でもこんなにたくさんの方があじさいを見に来てくれるのなら、もったときちんと手入れをして「あじさいまつり」をしようとして申し合わせ、あじさいの花が見頃な六月二十四日に決めました。会長大西武さんと私達若者が中心になって、中野地区全体で取り組むことになりました。さつ

そく十一月の文化祭に、あじさいまつりに備えての計画をパネルにして表して展示しました。又二月にはカラオケ大会もしました。お年寄りも見に来て下さるので、ただ歌ったのでは楽しくないということで、女性三人昼間の仕事の疲れも忘れ前日までかかって作った衣装を着て歌ったり踊ったり：たのしい一夜をすごしました。親

睦をはかることによって、ますます地区の皆さんがまとまり、いいアイデアも生まれてくるようです。



まん中が大西博子さん

す。もう一つ地域おこしで昨年三月から七月末までの夜間（昼間八時間労働で一人一カ月平均）男性六名女性一名のメンバーでカラオケ小屋名付

三月十一日には肥料の施しをします。近くに四国横断自動車走、県道山城―新居浜線の開通を目前に控える等道路事情も変わって来ます。六月二十四日の「あじさいまつり」までには、いろいろなことをしなければなりません。

ベンチやトイレ等を作り、遠来のお客様も地域の人も一時くつろげる場を設けたい。又こんやく・山菜を生かした特産加工品づくり、わらざうり・つづら籠など手づくりのお土産物や、あじさいの鉢植等を販売したり、お茶の接待等。

近所の家では民宿がわりにでもと宿泊もできるように予定しています。一人でも多くの人に足を止めてもらおうと、あじさいによる地域おこしの夢はどんどん広がります。

けて「あじさい館」を作りました。建設会社で余った物をいただいたり、家から廃材を持ちよっての作業でした。外見はトタンでできていますが、中に入ればカラオケ設備やステージ、杉皮の天井で茶室風の和室と凝った手作りの集会所です。大声で歌ったり話しても近所に迷惑をかけないので、明け方ちかくまで飲みあかす人もあります。

建設にあたっては地区内の人達の協力の輪も広がりました。広く地区内外や村外の人にも施設を解放して利用していただき、遠来者の休憩所、地元民との交流の場としても使っていくたく、小さな村からの情報発信基地にもなればよいと思っています。

ふるさとに対して 私が行っていること

瀬戸町 山本吉昭



山本 吉昭 さん

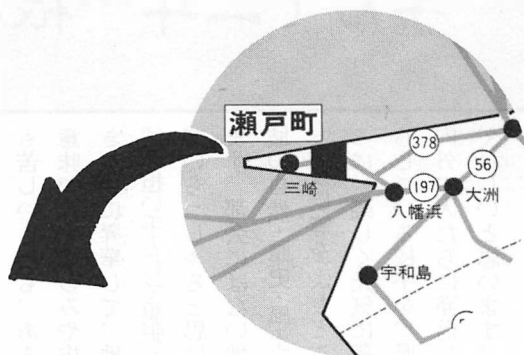
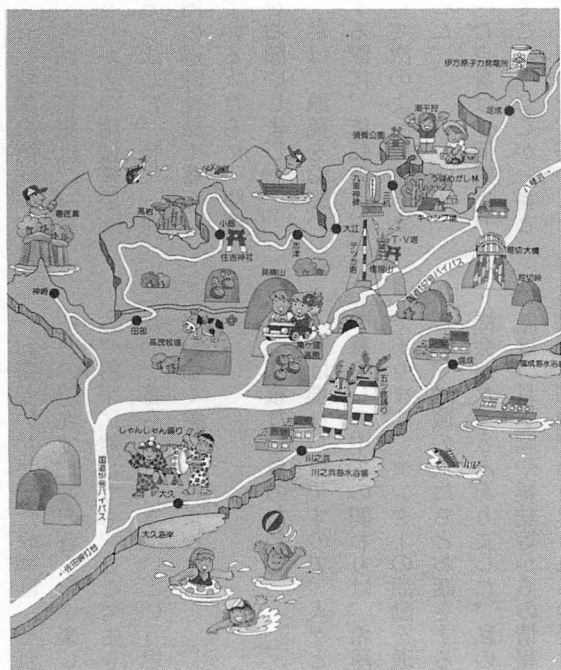
四半世紀と六年間にわたり、私
がこのまちに生きてきた歲月は、
夢を追ってきた時間であります。
私の今の生き方を語る前に、私の
ふるさと「大久」の紹介をさせて
頂きます。愛媛県の最西端に位置
する日本一細長い佐田岬半島の中
程に、私の愛する瀬戸町がありま
す。人柄は温厚、純朴、世話好き、
自然美に恵まれ四国一と自負する
リアス式海岸、瀬戸内海と、宇和
海が一望できる山々。地域の人た
ちも元気です。ビレッジ・アクティ
ブ・大久（V A 大久）という組織
をつくり、夏場の地引き網イベン
トをしたりして、地域外の人をよ
びこむ活動も行っています。しか
し、ただ一つ足りないものは、人
口だと思っています。

私に何ができるか

さて、この町で私に何が出来
るか、我々が何をすべきか、そうい
う想いが、今回自分達で何かをや
ろうという漠然とした気持ちにつ
ながり、同志をつのり、今現在、
総勢九名のメンバーが集まりました。
一人一人の想いは、若干相違
がありますが、このまち、この
「大久」を元気ある住み良い所に
したい気持ちは同じだと思っています。
まず互いの考えが一致したのは、
「夢をいつまでも語れるような、
空間があればいいなあ」という、
想いで、場所作りから始め、メン
バーの倉庫を借りて、活動の拠点
が出来上りました。広さは、十二
畳あまりですが、室内には、テレ
ビ・ビデオのほかに、飲食のため
の冷蔵庫・流し台から、連絡用の
電話も設置し、夜を徹しての話し
合いにも充分に対応できる、活動
の拠点としては、申し分ない設備
を整えていると思います。尚、こ
の部屋の維持費については、会員
から集めた会費と、いろいろな活
動によって得た収益によって運営

しています。又、会員一人一人が
自分の好きな時間にこの部屋に來
て利用できるように、各個人に、
部屋の相鍵を配布しています。こ
れにより、時間に縛られない自由
な活動ができると思います。そし
て、会員同志の和を保つために、
月に一回、定例会を開き、会員の
意見を活動に反映させるように努
めています。又、会員外の人との
隔りをなくするために、ソフトボー
ル、野球、青年団活動などにも部
屋を開放し、少しでも多くの人に
自分たちの活動を理解してもらい、
輪を広げて行こうと思っています。





若者の力を地域に

具体的な活動内容としては、初めに、人口の減少などの理由により、年毎に低下している秋祭り、盆おどりなどの活動に対する積極的な参加はもとより、青年団が行っている地元児童の健全育成のため



活動の基本的な方針としては、今頼りがちの行政に左右されることなく、すべて自分達の考えと力で一つ一つ物事をやりとげていくということです。とかくボランティアになりがちなふるさとづくりではなく、又、責任のない言葉を持

のキャンプ活動などへのバックアップや地域に残る伝統芸能の伝承などの活動を行っています。今のところは、人数的な面もありこのような活動にとどまっていますが、将来的には、ふるさと「大久」の自然と風土を活かした活動の展開を進めたいと考えています。また、

つ団体にならないように活動を続けて行きたいと思っています。今自分達に何ができるか、今自分たちが何をしなければいけないかという意識を常に持って、ふるさと「大久」のために、前向きに活動を続けて行こうと思っています。

“学んで二年…根なし草のたわ言”

編集事務局 山 本 幹 男

☆ 特集の意味

今回の特集は、「暮らしからの地域賛歌」としました。特に、県内の過疎地域で暮らしている人たちに、原稿をお願いしました。

私は、原稿をお願いする際に、依頼者に対して次のように書きました。

「ご自身は、何処よりもここ、ここが一番という想いで、辛いことも苦しいことも、ある意味では、楽しみや生きがいに昇華して、地域の担い手として頑張っているんじゃないでしょうか。都会にはない地域の自然・歴史・風土・友・家族等をよりどころに、楽しく元気に暮らしている様子を、県内外の人たちに発信してほしいと思います。」と…。

お寄せいただいた原稿は、それぞれの感性で地域の暮らしを楽しみ、将来に対しても、ここで生きたい、暮らして行きたいという思いが強く感じられました。

☆ 根なし草のたわ言

私は根なし草ですので、人々の暮らしの中での関わりは、希薄であります。センターの活動を通じて、地域の人たちとお話をする機会がたくさんありました。私の話は、耳学問や雑誌等からの情報による知識であり、それらの受け売りで話をします。しかし、いずれはそのメッキは剥がれ、地域に根を張って暮らしている方々の、実践と暮らしからの話に圧倒されることとなります。

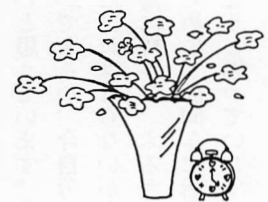
その時に思うことは、日頃の情報収集活動や経験による実感をいかに蓄えているか、と言うことでもあります。先日の私どもが主催した集会で、東大の大森先生が言われた「もっと、たくさん話したい」と思う積極的な意識と行動でもって、地域に暮らし人々と、肌着

（裸ではない。）のつきあいが必要であろうと、いつも痛感する日々であります。

☆ 過疎地の暮らしは今

過疎地のある首長さんが、こんなことを言われていたの思い出します。「私は、自分の町が良くなるようにと、いろいろな施策を展開してきました。これらは、どれもこれも、総ては過疎対策に行き着くのです。」と…。

折しも、国の過疎対策として、若者の定住策を目玉とした「過疎地域活性化特別措置法」が近く成立する見通しであります。一般的に過疎対策と言えば、都市部との格差の是正と言う意味で、道路整備に代表されるように、社会資本の充実を目指して進められて来たように思います。今回の施策の「若者が定住できる」地域とは、どんなものだろうか？と考えた時に、日本の場合、過疎地域と言えども、道路は舗装され、家には電化製品、車等生活用品は、都市部と比較しても、何ら遜色はない。



若者が定住したいと思う何かが足りないのではありません。我が町には、誇れる自然・人情・風土があると言ってみても、だめであります。

先日の若者塾の集会で、熊本県小国町の宮崎町長さんは、こんな風に言っていました。

「若者が残らないのは、過疎に魅力を感じないんです。活性化には若者の力が必要です。何をやって元気がでるか？、職場がないから若者が残らないのではない。若者が気軽にアフター・ファイブを楽しむことができる、都市的な魅力がある界隈を、地域内に創出しなければ、残らないですね。」と…。

続けて、「地域の資源・特性を、如何に地域の人々が、固有の知恵と力でもって味付けし、生かして行くかが大事です。」と…。

☆ 地域と行政の関わり

地域の付加価値づくりは、最後には、そこに暮らす人々の主体性に拘って来ます。それは、地域を思う若者たちに、意識も行動力もより強いと思います。

そこで、そのような住民の地域自立に対する動きを、行政としても、地域に張ったアンテナをより研ぎ澄まして、良いものは良い、良いことは良いと言える柔軟な心で、よいしょしていくことも必要であろうと感じています。

暮らしの視点で物事を見た時、行政は縦割りではなく、一つであります。そこで、センターの基本的な考え方としての「望ましい地域づくり活動像」が浮かんで参ります。

それは、「地域の人々が、より人間らしい暮らしを希い、身の回りの生活自治を原点として行う活動で、そのような住民活動と、目利きある自治体行政が一緒になって地域自立を目指す活動」と考えています。センターでは、このような視点で、今後の地域づくり活

動のお手伝いを続けて参りたいと思っています。

☆ 地域のアメニティづくり

最近、「魔女の宅急便」と言うアニメを見ました。大人の仲間入りの儀式として、魔女の修行に出た少女が見知らぬ町に降りたち、自分の力だけで、住む家を探し、また、

生業としての宅急便をしなから、地域の人々の愛に育まれながら、しかし、人々に対して誠実な愛を返していく、成長していく物語でありました。

その町は、私が見る限り、過疎の町ではございませんでした。しかし、そんなに大きな町でもありませんでした。時代のキーワードの「アメニティ」豊かで、人々が生き生きと暮らす町でありました。



そこには何か、若者が残る地域のヒントになるものがあるようにも思えました。

過疎地域の活性化を言う時、そこにはいろいろな要素が複雑に絡み合って、一朝一夕にはいかない問題ですが、先述の大森先生の言葉を借りれば「アメニティ、それは、あるべき所に、あるべき物がちゃんとあること」

「だそうですから、地域のCIづくりにおいても地域の特性をいかした、らしさを念頭に置きながら、住民と行政の「共生と連帯」のふるさとづくりを進めていただきたいと願っています。

☆ 結びに代えて

県内の過疎町村は現在四十、新過疎法では四十一になるそうですが、多分まだまだ県内でも、都市

的要素を持つている地域への人口移動は、しばらくは続くでしょうが、若い人たちの中にも、地域で暮らしたいと願っている人が多数います。

大分県の中谷健太郎さんは、「ムラおこし」について、述べています。「地域には、地域の風土があります。そこに人が住み、風土と関わりながら生きています。風土と人の拘りをしっかり培い、構築することが（生きる）ことの中身であり、それがムラおこしの元であります。」と。

私も、いずれは田舎へ帰って暮らしたいと思うはあります。しかし、何か、もう一歩踏み切れないものがあるのです。こんな若者（？）は、私だけなんでしょうか？

以上は、取り留めもない根なし草のたわ言でございます。失礼いたしました。

雪国・金沢へ

大阪駅を出た列車が一時間も走らないうちに左方向に雪を抱いた山々が見え、右方向には琵琶湖が開けてくる。金沢もきつときれいな雪に包まれているのだらうと思いつつ、うとうと夢の世界へ。

目を覚ますと十一時を回っている。もうすぐ金沢だが、窓の外には雪の気配がない。これは夢か、いや、さっき夢から覚めたばかりではないか。

金沢駅に着いても、雪はおろかフードピアも見えない。地元の人によると、一週間前にはドカッと降ったということだが、きれいなもので雪は無い。「雪国に雪のないのは雪国じゃないなあ」と感じながらの淋しいファーストシーンとなったが、ともかく市内へと潜入。

鮫鯨鍋は民主的で無礼構

浅野川沿いの一帯にも夜になると、あちこちでフードピアが風に吹かれてゆれている。提灯に灯りがともり、ほのかに静かに浮かび

あがる。みどり色ののれんをくぐり、食談会場の料理旅館「まつ本」へ入る。

会場ではまず、講師の話しをじっくりと聞いてからと

思いきや、周囲はまるで新年会。いつしか乾杯が始まり講師の存在が遠くなる。

コーディネーターも啞然として話に入っているがダメ！。ついにはカラオケ用のマイクを持ち出した講師二人。最初のうちはばらくは聞いているが、大勢の力の前にかなり押され気味。しばらく何とか頑張ってみたけれどあえなくダウン。

「もういいや」とば

かりに講師も指定された席へ。折角、話が聞けるものと期待していたのに残念。でも座った場所が良かったのか、我々のテーブルには

雪吊りの少ない雪の出番

フードピア金沢'90から

(財)愛媛県まちづくり総合センター
豊田 渉

作家の山口文憲さん。それもうまく隣の席に座ることができた。

「日本人は、テーブルの上で料理する。キッチンが無いんだ」と外国に行くときよく言われる。「すき焼き、

鉄板焼き、水炊きなど。しかし、鍋は民主的であり無礼講で食べられるのだ」と。そうなれば、この会場は民主的で無礼構なのだ。鮫鯨（あんこう）は初めての味。肝や腸に皮まで食べられた。最後に出了た雑炊とアイスクリームがことのほか旨かった。ホテルに帰って、鮫鯨のグロテスクな姿はテレビで観た。

市内のメインスト

リートには、賑やかな雪吊りのイルミネーションが浮き上がっていた。これに雪があつてシングルベルが聞こえれば、「メリークリスマス！」。その夜

は凄いいびきのシングルベルを奏でながら、よく眠ったようだ。

まちかどウォッチング

金沢の町を歩いたも歩いた。町はとてもお洒落でいろいろ工夫されている。町がえらくすっきりとできていると思ったら、歩道橋らしきものが無い。あつたのかもしれないが三日間の滞在中、私の頭の中から歩道橋の三文字が消えていた。あつたのかどうか、よく思い出せない。

街路灯はいろんな形があり、歩道はレンガを巧みに使っていて楽しい。横断歩道で白と茶のタイルを使っているのはいいが、塗料で描かれている横断歩道は、スパイクタイヤにこすられて消えてしまっている。初めのうち、消されて見えない横断歩道を渡っている光景には少々とまどった。

古い建物があちこちに残っていて、屋根が傾いたもの、壁が落ちかけのもの、それでも人が生活し商売に使っているところも少なくない。それがひっそりとしてでな

く堂々と建っている。三階建てのものも多い。あめの「俵屋」、うどん・そばの「砂場」、町民文化館、みそ・醬油屋、おかし屋など。浅野川沿いを風に吹かれての散策は、とても風情があっている。表通りよりも裏通りの方が抜群。裏道へ入ると別の世界があったり、新発見もあったりの、異次元空間をウロウロの気分。戦災に遭わなかったのが残されている要因ではあるが、時代の変化とともに使にくい面が出てきているのかもしれない。

かといって古いものばかりでもない。ホテルと一体となったデパートやファッションビルがひしめく。駅前では大きなデパートの新築工事の真っ最中。駅前一帯は再開発地域として新しい顔が将来できあがる。次に訪れる時はどう変わっているのだろうか。古いものと新しいものとのバランスをこれからも大事にしてほしい気がする。

深く静かにフードピア

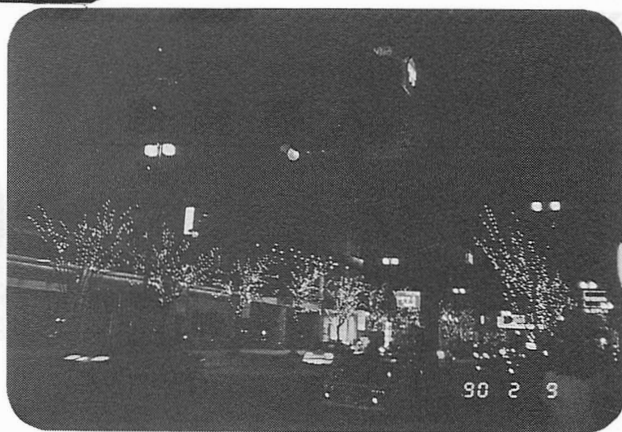
フードピアの凄さの一つは、ハ



← フードピア・金沢の冬の顔です。

香林坊近くの

イルミネーション →



十人もの人を数日間スケジュールを調整して呼べること。それは金沢というブランドだからであらう。ある講師は、「金沢だから来たので、他のところだったら来なかったよ」とポロリ。うーむ、金沢には料理にしるお菓子にしろうまいものがいっぱいあるし、古いまちなみなども残っている。それを支えているのは、文化的な土壌を守っていることだけでなく、批判的なことを大事にしながら、新しいものを生み出す要素も持っているからかもしれない。

フードピア金沢はまだ市民の間では浸透していない面もあるようだが、冬の石川県を代表するイベントに育っているようだ。総動員型のものでなく、興味のある人が興味のあるところへかけていき、県内のあちこちで深く静かに進行している。一人一人がバラバラにやっているようでも、形としては「フードピア金沢」として、あちこちで顔を出している。まちかどに時おりフードピアが顔を出して手招きしている。

雪のなかった三日間

それにしても今回、金沢に雪はなかった。生活をするには雪の少ない方がいいに決まっているが、フードピア金沢といえば、やはり

金沢JCの担当者や町で出会った人々には親切にしてもらった。思えば金沢を訪ねたのは今まで二回。二回とも団体旅行。それらはただ風のように通りすぎただけ。



雪が欲しい。兼六園で見た雪吊りが淋しそうにしていた。春までもう一度出番があってもいいような気がした。

今回は、雪はなかったものの曇り・晴れ・雨とバラエティーに富んだ三日間だった。それでも、殆んどわかっていないのが実状のようだ。

まちづくり総合センター 人事消息

・3月31日付けで、活動の拠点が少しかわりました…が、今までどおりよろしく願います。

- * 所長 宮本 俊一 (愛媛県研修所)
- * 研究員 幸地 慎一 (経済連)
- * 研究員 井上 謙二 (野村町役場)



平成元年度 センター職員
(上段左から) 石川・豊田・山本・幸地・井上
(下段左から) 丹下・宮本所長・久保田



研究員 山岡 強
(御荘町役場)



研究員 宇都宮 正昭
(経済連)



所長 渡邊 智

はじめまして！
・四月一日から「まちセン」の一員です。よろしく願います。



レポート

島々を虹で結ぶ女性グループ

「れいんぼう」

伯方町 白石 なつか



レポート

きっかけは、学校PTAの読書会でした。終ってからの雑談の中からフォークの神様「岡林信康」の話が出て、「二百人集めれば、どこでだって、ギターひとつかかえて出前コンサートをやってくれるらしい」。我々の手でもできそうじゃない?」と、急きょ「れいんぼう」が結成されました。女性ばかりの有志七人ということ、いろんな所への架け橋となればいいなということで「れいんぼう」と名づけました。

何も知らないという事は恐ろしいもので、資金もゼロ、手さぐりで四苦八苦しながら、しかも次々と起きる予想だになかったメンバーの病気・家族の入院騒ぎなど、頭をかかえながら無我夢中のうちにコンサートは開催され大成をおさめました。

まったくの素人のおばさん達「れいんぼう」を支えてくれたのは商工会の青年部の若い人達でした。組織力のない我々にとって、百人力でした。一人一人では何も出来ないけれど、手を延ばせば、



レポート

声をかければ、何かをやるという気持ちひそんでいる人達がいる事に気付き、とてもうれしく思いました。

あれだけ苦しかったコンサート開催の辛さは、終ってみれば快感で、凝りもせず、次は、林 洋子さんの「宮沢賢治の世界」というアイリッシュハーブと語りきかせの公演を行い、これまたみんなの協力で無事成功をおさめました。

我々の手で、村おこし、町づくり、ふるさと創生、そんな大袈裟



後列左から3人目が白石さん



レポート

なんもんじゃないけれど、何かの起爆剤になればそれで大満足で、まったくの素人のおばさん達が、若い青年達と手を取り合ってコンサートを大成功に収めたという事が町の人達へ一石を投じたというのは確かな様です。

さあこれからも期待されてる事は、重荷にもなりますが、又励みにもなり、これは実現するかどうかかわからないけれど、松井朝子さんという人の「パントマイム」をこの町の人達に紹介したい。三年位先には、もう一度、岡林さんのコンサートを聞きたい。それから、それから...と夢が広がります。町とか行政とかが、セットしてくれたものに参加するのも勉強ですが、町や行政にお世話になりながらも、自分達や仲間や回りの人達の求める事、下から沸き上がる気持ちのあるものを手がけてゆけたら、それがこれからの「れいんぼう」の抱負なのです。

「町づくりの活動は、組織を作らんことよ」と言われ、「そんな馬鹿な」と問い直したのが、私のネットワーキング病の始まりなんです。このお話は、第一話で紹介しました、1町の面白い人たちとの出会いの続編でして、彼らの町づくり活動の凄さ話です。

「この指とまれ：活動で参加の自由」

1町の人たちは、この私の疑わしげな問いに、実に愉快な語り口で答えてくれたんですが、私流に解釈しますと、それは子供の『遊び』なんですネ。誰かが何かの町づくり活動を思いつくと、その誰かさんが「鬼ごっこするモンこの指とまれ」と、町の人たちに呼びかけるんです。

すると、例えば「青空市」なら青空市をやりたい人がその指にとまって、鬼ごっこが鬼ごっここのルールで遊ぶように、青空市ならそのルールで「青空市遊ぶ」の間、組織活動をするんですが、終われば解散して組織がなくなり、次の「かくれんぼ」に参加するしないは全く自由になるんですネ。この『参加の自由』こそが、「町づくり活動の知恵と元気を産む源泉だ」と、彼らは言うんです。

もっとも、このお遊びでは、よくある地域活動のように、地域ぐるみでとか、〇〇会員だから等と、町の人たちを動員することがで

きませんから、もしそのプランが町の人たちに受けねば、計画者だけで活動する覚悟がいるんです。彼らはそれを、『王侯貴族の音楽会』だと言って笑ってましたが、私はその笑いが彼らの性根だと思いました。もちろん、この意味はお判り頂けるですよネ。

「町の人たちが愉しむ：地域活動」

だから彼らは、一つ一つの活動にいろいろな工夫をして、つぎつぎと楽しい組織活動を行い、その都度解散しているんですが、それ

地域づくり 学んで三年 よもやま話ノート

第二話／少々頭が痛くなる話

えひめ地域づくり研究会議／運営委員

宮本俊一

その活動は、その「根っこ」のところで一つのスジにつながっていくんです。

例えば、町の中を流れる〇川の川原で、子供の遊び場まで作った「青空市」を開くと、次は、家族揃って「〇川ウォークラリー」。次には、子供が大好きな〇川名物／風合戦イメージの「日本の風展」。そしてきわめつけが、〇川のはとりに、かぐや姫の生誕地を創って「かぐや姫まつり」を開き、子供たちに「〇川の自然を守ろう」と訴えるんです。

言うまでもなく、子供が喜ばばママも嬉しいし、子供とママが来ればパパもと、彼らの

催しに集まった町の人たちは、その時、その場のイベントを愉しむんですが、それが知らず知らずの間に秘められたテーマ「〇川に親しむ」：気分を高めていくんです。

彼らはその頃合を見計って、「〇川を綺麗にする石一個カンパ運動」をおこし、「みんな、〇川のコンクリート護岸を石積み護岸に替えて綺麗にし、自然の生態系を守ろうよ」と訴えるんです。それも「いらぬ沢庵石カンパ」だったんですが、それでは役立たんと判る：愉快な道草遊びもありました。

ともあれ、こうした町の人たちの組織を作らん組織活動は、国や県の河川改修や橋の改築を、町の人たちの希望に沿わせたり、町に「原っぱ条例」や「風博物館」を創らせる等々：の成果をとめないながら、町の人たち手づくりの町づくりを進めているんです。

「よもだ塾のアイデンティティ」

ところで私は、彼らが「この指とまれ」：の活動をいとも簡単に話すもんですから、「組織を作らん組織活動と言っても陰しテーマに添って、つぎつぎにイベントおこしができる『仲間の組織』があるからじゃあないの」と少々皮肉を込めて問いかけたんです。すると、「あんた何に聞いてったん。そりゃー僕らは『よもだ塾』ちゅう勉強会をしるケ



ンど、それも『この指とまれ…』じゃケン同じよ』とのしっぺ返しでした。

つまり「よもだ塾」という、町づくりを勉強する、組織でない組織活動では、参加した人個々人が、自由に自分のやりたいことを、自前で地域活動に表現する実行を産みだしているだけで、「塾」としては実践活動をしていません。例えば塾の勉強で、誰かが商工会に向いた活動を思いつけば、その誰かが商工会へ提案し、そこで活動するやり方です。それは、部落会でも、婦人会でも、観光協会でもなんですが、もし、何処もやらねば、その誰かが、活動のための実行委員を、この指とまれ…で募って実行するワケです。もちろん、塾員でもやりたい人は参加します。

この考え方には、いろいろと深い意味があるようですが、私流では単純に、組織は活動の道具なんだから、活動に合った道具を使えばよい。町にこれ以上タテ割り組織ができれば、町は使えん道具の物置になるばかりか、タテ割り同士のナワ張り争いでも起これば、町づくりに有害なだけだ…と理解しました。

「本当に町が好きな人たちの英知」

ともあれ、彼らの「塾」では、『素敵な

町づくり』をしたいと思う人たちが、自由に集まり「勉強遊び」をしてるんですが、初めの頃、徹底した基本理念の勉強を続け、彼らが「I藩の憲法」と呼ぶ、戦略目標『美しい自然・美しい人・美しいネットワーク』を定めているんです。従って、さっきの話のようなイベント活動は、この戦略目標の実現を工夫した戦術になるんですが、どうも彼らの勉強は、そうした地域活動の基本ベースを、常に吟味している活動のように思えました。

彼らは、「イベントするのが愉しくて…、愉しくて…」と言っていますが、それは彼らの、『町の人たちに訴えたいことは、言葉でなく、イベントに翻訳して訴える』ことが、町の人たちに通じてゆく愉しさであり、目標をもった一連の「イベント誘導策」が、着実に進展する喜びではないでしょうか。

いずれにしても、本物の地域づくり活動の要とも言うべき、『参加の自由』を守る「この指とまれ方式」と、それを「住民手づくりの地域づくり活動」に高める「イベント誘導策」は、本当に地域が好きな人たちだからこそ産みだせた、素晴らしい地域活動の英知だと思いますとともに、例によって私流には、『よもだ塾』の本質は、町の「生きざま」をテーマとする『地域活動のプロデュース機能』なんだと…理解したワケです。

「楽しいライフワークへの切り口」

このI町の面白い人たちとの出会いは、私の「地域づくり運動論」にとって、決定的ともいべき幾つかの契機を与えてくれましたが、その切り口となったのは、『この指とまれ…』の童遊び活動方式でした。

当時私は、庶民のコミュニケーション・メディアとして『パソコン通信/TOWNタウン局』の開設を手伝っていましたが、その指導に当たった「ネットワークデザイン研究所/東京」の中村宏幸さんから、ネットワークにingを加えた、米国生まれの新しい社会活動の概念『ネットワークング』を学び、「地域づくり運動の本質を活かす組織活動は、これだ…」と想っていた時だったんです。

もっとも、風土や歴史、社会・文化等の実態が異なる米国原産のこの組織活動概念を、私たちの「地域づくり運動」に移植することとはできません。そんなことでモタモタしていたおりですからネ、「オッ！愛媛原産のネットワークングがあるじゃないか…」となったワケです。それ以来、私にとって「地域づくり運動」は、本当に楽しいライフワークとなりましたが、判って頂けますよネ。

(第二回)から

井上謙二

吹く風に早春の気配が感じられる2月27日・28日、再び「今、なぜ『地域づくり』なのか」からそれぞれの地域づくり活動を考え合おうと、『90えひめ地域づくり活動者集会』が開催された。

この集会は、県下の地域づくり活動者や今後関心を持って取り組もうとされる皆さんの、顔の見える交流とホンネで自由闊達な意見交換の場として、またそれぞれの地域づくりへの取り組みがより素晴らしいものになればといった願いによるもので、「ネットワーキングの現場」と「学習の場」であったように思う。

その二日目は、前日の四つのフ
ォーラムの参加者が初めて一堂に
集う形での「従って Joint
(つなぐ、連合)・フォーラム」

『パネル討議』と『総括講演』に二百三十名の方々が参加された。

岡田文淑さんのコーディネートのもと、各フォーラムで基調講演をいただいた高橋寛治さん・緒方重成さん・佐藤 優さん・立川百恵さんをパネリストとして、「くらしの視点から地域の未来づくりを」というテーマで討議された。

高橋さんからは、まちや地域を考えるとときに「内発的な力で地域を高めよう」とする住民自治・地域自治を基本に、常に「まちの格を上げていく」ことを意識しながら、市民と対等な立場で語り合い、市民と共に活動していくという考え方を…。

緒方さんからは、湯布院町の民間主導のまちづくりには、昭和30〜40年代にそれを支えたすばらしい町長がいたというお話から、首長やリーダーの資質の問題を。

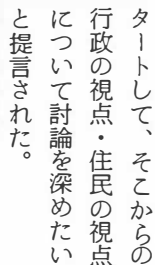
またそれに比して、最近どうも行政に住民の言葉が通じない面が

あり、もっと住民の声を聞き、住民と共に学び考え合うことの必要性を、JR駅舎の改築問題を例としてお話いただいた。

佐藤さんは、行政マンが市民から逃げずに、市民の中に入っていく、

市民を追いかける気持ちで対話する姿勢。また景観については、「私有物であっても、見慣れた風景というものは山や川と同じように市民の共有財産なんだから頼む」の一本やりで、建造物の保存に取り組まれたお話を。

立川さんは、「くらしの視点」から、人びとがどう生きたいどう暮らしたいと願っているかを基に地域づくりを考えることが大事だ。また、地方の自立が言われ始めているが、このことが重要だと思う。「自分たち自身がどう考えていくのか」ということからス



岡田さんからも、行政マンとしてどれだけ住民の感覚が分かるかといったところから入らないと、本物の暮らしの視点は生み出せない。この「住民と行政の接点」が今後の地域づくりのモノの見方・考え方につながるといふ、まとめとしてのご発言をいただいた。

こうした「住民と行政とのかわり方」と同時に、今後の地域づくりの視点として、それぞれの地域に住む一人一人の生き方、くらし方を私たちが考えるところからスタートしたいと思う。

二日間にわたる集会の締め括りとして、東京大学の大森 彌先生から「再考／いま、なぜ「地域づくり」なのか」のテーマでご講演



をいただいた。大森先生のお話は
何度伺っても、身につまされて心
打たれるものを感じる…。

◎地域・相手への恋心

前日のフォーラムⅣでの「一生
農業を続けたい」という片山さん
の言葉から、結局地域づくりで何
が問われるかという、それぞれ
の方々が、自分がどういう人生を
送りたいのかということとどこか
で決心することだ。決心すると自
分のことや地域が見えてくる。決
心した自分を意識することで自己
形成していくことができる。

「もっと・たくさん・話したい」
というCMコピーの話からは、もっ
と話したいというコミュニケーション
の基礎は恋心であり、相手が好
きかどうかである。「好きだ」と

いうことは相手に対する強い関心
である、と。

ここでふと、五十崎町の亀岡さ
んの「人は信用せず愛しなさい」
という言葉と、久万町の渡辺さん
の「愛とは向かうもの」という名
言（私はそう思っている）が、オー
バーラップして思い出された。

◎日常の小さな事柄から

役所や住民を含む文化の問題だ
というお話の中から、「自分たち
で納得できる言葉を持ち得るかど
うかである」こと。どういうふう
にものを感じ、どう考えるか。そ
れによって可能になった具体的な
ものの中に、そういう人びとの想
いや願いが全部込められているこ
とが大切である。

もう少し具体的に言えば、自分
の地域で、ある事業を起こす時に
「こういう事業でありたい、こう
いうことを可能にする事業であり
たい、その地域にふさわしい事業
でありたい」というのが、文化的
な感覚のことである…。

もう一つ地域づくりで大事なの

は、「日常」というのは平凡で退
屈なものである。その日常のごく
あたりまえのことをどう考え、大
事にするかということだ。地味で
目立たない小さな事柄の中に、世
界が宿っている。

小さな事柄が連続して初めて大
きな事が可能になるわけで、それ
をおろそかにせず、小さな事柄の
中に様々のことを仕込み、埋め込
んでいくことが大切である。

そうしないと小さな事は輝かな
いし、逆に言うと、どんなささや
かな事でも将来大きく輝き得る可
能性を秘めているのである。

■おわりに：

今回の集会で感じたのは、地域
づくりへの関心が益々深まってい
るとともに、職業として関心を寄
せる人もまた増えているというこ
とである。従ってその切り口とし
てのテーマにしても、参加する方々
の個々の捉え方や期待が益々多様
になって、かなり明確なテーマの
設定が必要になると思われる。

と同時に、「そこに住む一人一
人のくらしと、真の豊かさ」を追

求し続ける視点を、どうしても外
すわけにはいかないという想いを
改めてかみしめている。

ともあれ、スタッフの人数や力
量をも省みず、四つのフォーラム
を設定したための準備不足や至ら
なさを、講師の方々ははじめ話題
提供者や司会の皆様の、日頃の実
践に基づいた心に触れるお話とご
助言により、意味のある会として
いただきましたことを心より感謝
いたしております。

より強い希望を持って、積み重
ねる努力を続けたいと思います。
今後ともよろしく願ひします。



90えひめ地域づくり活動者集会 報告

フォーラムI

「地域自立をめざす」地域経営のあり方を…」

まちづくり総合センター 山本幹男

★ はじめに

まちづくり、むらおこし、ふるさとおこし、地域づくり…。このような言葉が、新聞紙上に載らない日はない、と言っても過言ではない。時代のキーワードとなつて久しい。永い歴史の中で、営々として受け継がれて来た地域のあり方が、いま問われている。過疎地域では、その存亡を賭での取り組みとして、また、都市部では、景観、環境の保全活動としてなど、地域に拘った活動が、活発に展開されている。

フォーラムIでは、特に自治体行政として、地域の人、モノ、風土等の独自の取り組みや変化を、総合的に誘導しながら、地域自立を目指していく、地域経営の視点とそのあり方を考えたいと思ったのです。

★ フォーラム語録

当日、当フォーラムには、約八十名のご参加を頂きまして、基調講演には、「りんご並木」と「人形劇フェスティバル」で有名な長野県飯田市の高橋寛治さん、県内の話題提供者に、城川町の増田町長さんと中島町の大崎課長さんをお迎えし、暮らしの視点からの地域経営、地域自立を探ろうとしました。

以下、三人のお話の中から、私なりに、心に残った言葉を紹介したいと思います。

— 高橋 寛治さん —

○ 自分にとって、まちづくりとは、地域に拘り続けることである。自分がやってきたことを、きちっとやり続けることであり、自分のこととして拘り続けることである。



○ 自分の町の職員によく言うことは、住民の生活要求（道を作ってほしいとか、下水を綺麗にしてほしい等）を政策要求に出来ない職員は、ダメだよ。それも、単純にやるだけじゃなくて政策理念を持たなきゃ、ダメだよ。

○ 物事には、必要条件と十分条件がある。若者の定着を言う時に、雇用の場の創出とか、都市的施設の整備とかは、必要条件であり、これだけでは定着しない。十分条件がある。それは地域に拘り続けること、つまり地

域の学習度の集積だろうと思う。文化がなくなっちゃいけない。

○ この町に子供は残るか？という言葉が好きだ。この家庭に子供は残るかとも、置き替えられるが、最小単位の家庭で、如何に両親が楽しくやっているかが子供も、将来、残ったり帰ってくる。

— 増田純一郎さん —

○ 「わがむらは、美しく」これがわが町のまちづくりの基本テーマです。基本は三つあり、一つは、生活環境を美しくすること。二つには、それを取り巻く農地の環境が美しくあること（農業振興）。三つには、それらを取り巻く山の姿が美しくあること（林業振興）。とにかく、たった一度しか生まれてこないこの世の中、住んで良かったなあと言われる町でありたい。

○ 日本人はモノにお金を投資するが、欧米人は、心の糧に惜しみなく投資する。

○ 職員に対しては、自分のことは自分でしろと言っている。ま

た君のしている仕事は、町では、君一人しかやっていないと言う気持ちになって、自分のこととしての自覚を持ってほしい。

—大崎 巖さん—

○ これからの時代は、休みが多くなって、夫婦とも遊びの時代になると思う。

○ 地域を知ってもらうために、いろいろとイベントをやってきたが、このイベントは博覧会のような一過性のものでなくて、継続性のある集客力のあるものであって、イベントが、地域の承認を得るためには、地域の経済に関与できるのが問題であり、今、イベントからビジネスへどう転換できるか？を、一生懸命考えています。

○ まちづくりは、まちがある限り続くんだ。まちづくりは、遠い未来へのロマンを持って、着実に将来予測を持って、できれば格上のまちづくりを目指しています。そういう中から、住民が住んでよかったなあと考えるまちへ、人が来ていただけるよ

うなまちづくりしていきたいと思えます。

★ ちょっと一息

わがセンターでは、少々抽象的になるかもしれませんが、「地域づくり活動像」とは、地域の人が、より人間らしい暮らしを希い、身の回りの生活自治を原点として、それを願う住民活動と自治体行政が、協働して行う共生と連帯の活動と規定しています。

裸の王様に、裸だよと言ってくられるネットワーキングと、住民の暮らしを第一に考える貧しき王様の視点で、「地域元気は暮らしの元気、暮らしの元気は地域の元気」を目指しているのです。

★ おわりに

地域自立を言う時、当センターの宮本前所長さんは、よくこんなことを言われました。

「普通の人たちは、普通の暮らしをしています。生業を持ち、目立たないが、律儀で真面目で起伏の少ない日常生活をしています。この人たちは積極的に他人に役立

つことはしない替わりに、他人に迷惑をかけない暮らし方をしています。地域づくり活動者は、そんな人の中から、地域社会のことに関心を持ち、少しでも世の中を良くしようとしている。奇特で酔狂なはみ出し人間なのです。」と。

同じようなことです。が、総括講演を頂いた東京大学の大森先生の言葉を借りれば、「その地域に住む人々が、愚痴を言わず、不平を漏らさず、他地域を単純に羨ましがらず、知恵を出し合い、歯を食

い縛って積み重ねている地域活性化の努力」が、地域で頑張っている、はみ出し人間の原動力であり地域の原動力にも繋がり、やがて地域自立に近づいていくようにも思います。

したがって、行政にとっては、そのような人々と連帯して、より良い地域を目指す営みが、地域経営であると言えるのではないでしようか。

こんなことで、フォーラムの報告になるのかな？と、いささか心配しながらも、報告に代えさせて頂きます。



「ひめ地域づくり活動者集会」報告

フォーラムⅡ

「これからの『地域産業』とくらしを…」

まちづくり総合センター 幸 地 慎 一

地域と産業の未来づくり——と
りわけ過疎に悩む地域にとって地
域経済活性化は切実な課題であり、
地域独自で様々な取り組みもされ
るようになって来ている。ただ、
地域に住む人々の「暮らしの視点」
が忘れられたままで、本当の役割
が果たせるだろうか…。地域づ
くりを再考するという意味で、参
加者それぞれの視座で自らの実践
を振り返り、その中から地域と産
業の未来づくりを考えてみる場にな
れば、との願いをこめて開催され
た。

●基調講演

「地域産業—— 湯布院の模索」

大分合同新聞湯布院支局長・緒
方重成さんのお話は、自ら青年期
に公民館主事としてダム開発運動
の旗手として、また三十数年の新
聞記者生活を通して、そしていま

湯布院のまちづくりを願う活動者
の心の支えとして、郷土に捧げて
きた情熱の自分史でもあった。

温泉保養地湯布院の独自路線は
外部開発資本との闘いだったが、
それはいま失われようとしている
潤いや安らぎを育むために農業を、
自然環境という財産を守っていく
ことだった。そしていまなお外部
資本は、人・モノ・金・情報を集
積し、時代の要請を建前として、
あらゆる規制をクリアしながら迫っ
てきている。

この「守る」ということの中に、
農家自身にも農業に対する意欲よ
りも安易に観光に頼るという産業
構造上の問題が現実起こっている。
こうした危機感の中で、町の
進むべき進路を「潤いと安らぎの
ある町」とし、商・工・観光が有
機的に一体となった、湯布院独自
の地域内経済循環型の産業形態が
望まれた。そのキーワードを「も

てなしの産業文化」として、農業
では健康で安全な農産物、第二次
産業では文化性の高い「ものづく
り工房」、そして、もてなしの先
駆者としての観光、商業ではふれ
あいの「コミュニティマーケット構
想」、さらには町の長期構想の中
で培われた「湯布院クアオルト構
想」へと展開されている。

このような町の基本路線への歩
みの中で、民間リーダーたちはい
ま、「湯布院大航海時代」という
コンセプトを生み出している。し
かし、そういった事柄に対する理
解や外部資本に対する強制力や先



導力が、行政に期待されているに
もかわらず、その対応の遅れが
湯布院の将来に暗い影を投げ掛け
ている。

●話題提供

①「遊子における

漁業生産活動について」

遊子漁協・古谷組合長さんのお
話は、生産活動の拠点としての漁
協活動を地域のものとするために
独自の思想が貫かれている。その
基本の一つは、生産基盤である海
を地域に広く開放し、漁業経営の
基礎を平準化したことがあげられ
る。それは、家族労働を基礎に、
家族の生活充足が実現するような
漁業経営を築くこと。一方で競争
原理を生産者相互の中に内発させ
ていること。また、生産活動で発
生する様々な行為の中にいつも共
同の場を設定し、それが組合員相
互の教育活動ともなっていること
である。

さらに遊子の生産活動を支えて
いるもう一つの思想は、表層的な
形に妥協することのない「本物づ
くり」の積み重ねであり、地域の

「誇り」づくりであるが、これは常に本物を模索し続ける協同組合の使命感と、地域共同の積み重ねの大切さを示している。

②「地域産業は町の設計図」

ことばがなかなか通じない、という五十崎町の亀岡さん。地域づくりとは、人間を縛っている様々な事柄からお互いを開放することとしたうえで、地域産業は「すてきな町」を創るための三つの戦略の一つとし、その戦略とは、美しい人、美しい自然、美しいネットワークであって、地域産業は、美しいネットワークと位置づけている。

この位置づけの中で、商品には素材力と技術力があり、とくに田舎では、技術力が不足している。亀岡さん自身の経験から、技術力で訴求する相手に突き付けるナイフの役割こそが「地域力」であるという。この地域力がいま、ことが通じない地域内の矛盾と外部資本に押さえられ非常に弱まっている現実がある。地域産業はあく

まで「すてきな町」を創るための道具として、踏張りの効くものにしていくことの大切さを訴えた。

●フロア討論

湯布院の緒方さん、亀岡さんの話にも触れられていた「ことばが通じない」ことについて、地域産業に行政が果たす役割論が浮き上がった。

湯布院亀の井別荘生活工房の支配人である田井さんからは、民間と行政の女性たちのしたたかな水の運動を紹介し、これからは相互の融合が大切であり、理解し合うための共通語を持つことではないかとの意見もあった。

また、亀岡さんからは、行政と民間の間でことが通じにくいことは、すべて会議方式でなされていくことにあるとし、組織でない組織でことばを翻



訳することが必要だとしながらも、例えば、行政内部に町のいろんな計画について話し合い、検討し合う概念設計室を取り入れたり、住民が選択できる組織体制を、との提案があった。

行政マンの参加者からは、地域に住む人が、自ら危機感を持ち、行政と住民が相乗的に努力していく議論しかないこと。さらに、商

工関係の参加者は、地域に対する問題意識こそが大切であって、それが行政主導であれ民間主導であれ、激しく闘いあうということが大切であるとの意見もあった。

また、古谷組合長には「地域社会と共同」についての質問があり、これに対し、漁村には農業のような長いスパンでの共同づくりが大切であることを強調された。

長野県浪合村役場から参加された近藤さんからは、小さな村が二

十五年にわたって積み上げ誇りすら抱いていた観光開発も、いま社会の価値観の変化の中で、最近建設した教育施設が反響を呼び、都市からの移住者を生み出す現実からキーワードを懸命に追い求めている姿が生々しく語られた。

最後に古谷組合長が、自分のふるさとを愛すること、地域に住む人自身が心にかんだものを大切にしながら、一つ一つ積み上げていこうと締めくくった。

地域と産業の未来づくり...

湯布院のように二十年、三十年という歳月を経た先進地でさえも今だに模索し続けている町がある。しかし、その模索も地域の自主路線を歩もうとするための産みの苦しみの連続に違いない。参加者自らが感じとってもらえれば...このフォーラムではあったが、やはり地域産業とは自らが創造し、発展させる以外にないということ、その原動力は、実践を続けるもの同志がどれだけ地域を語り、愛し続けることができるのかを改めて知る思いであった。

『90えひめ地域づくり活動者集会』報告

フォーラムⅢ

「地域づくりからの 「景観」を…」

まちづくり総合センター

石川 元 英



これからの「景観」を論じる一つの切り口として、アロマ・スケープ（香りの景観）があるが、これを取り入れ、ハーブ伝導者の三好道子（Herba L. Kitchen / もじごじ / Owen）さんの粋な香りの演出、ローズの香り漂う会場の中で五感を総動員しながら「景観論」に花が咲いた。

【基調講演】

●佐藤 優（在研究所所長）さん

岩手県盛岡市をビジネスワルな映像でもっての紹介であった。誰もがもっている原風景というものは、良いものをみて育ったか悪いものをみて育ったかということが、子供たちの精神構造に何らかの影響を及ぼす。子供たちにはその選択はできない、だからこそ大人た

ちが頑張らなくてはいけない。

たかが景観というが、されど景観なのである。『まちの景観を創っていくというのは、ただ物理的に美を求めるというもののだけのものではなく、そこに住む人や子供たちが健全に育っていくということがまちの財産になっていく。』この考えを基本に橋を創るにしても道路を拡げる場合でも、何でもかんでも景観はどうだ！といったことを問いつける姿勢、自然や環境の保全条例や八環境デザイン委員会Vのようにトータルな意味で街を見ていく、それがまた市民の意識のなかに浸透していきながら景観を生み出していく。

景観を意識するのは、視覚だけに頼るのではなく身体全体で、さらに、住民に本音の生活をもってもらふことの必要性等…。

このような多くの先進事例の紹介を景観意識の向上やレベルアップにつなげていき、決して真似をするのではなく、こういう景観もあるという一つのヒントとして捉え、我がふるさとにあった独自の地域創造への奮起につなげてほしいものである。

【話題提供】

●天野征郎（新居浜

アメニティー倶楽部）さん

新居浜アメニティー倶楽部の「ゲンキ・ステキ・カイトキ・よろこびのまち新居浜」と

いう自慢のスローガンをバックボーンに地域の快適性を求める活動をされている。そして、具体的には、現在【お手玉】という音から残っている心温まるものを拡げることによって、皆の心をついにし、【お手玉】を大切にする心から、街をきれいにしていこう…。そういった人の心から美しい景観が生まれてくるのではないだろうか？

『立派な施設や建物を造るというハード面が全てではなく、その地域の歴史の中で培われたこまやかな人情をもとに、未来に向けての人々の夢の積み重ねから素晴らしい景観を得られるのではないだろうか。そして、その楽しさを味わえるのは、そこに住む人々だろう』、特に人の心の面からの景観づくりへの提言であった。

●河内紘一（内子町長さん

これまでの町並み保存から、さらに農山村部への村並み保存運動で地域づくりを目指すべく景観行政を進めている。他にはないものをどんなのぼしていく「内子らしさ」を求め「花より団子から花から団子」といった言葉が印象的であった。

温かい人の心と素晴らしい自然が曼陀羅のように協和した世界・桃源郷を『愛』あるまちづくりを公民館等を中心に横のつながりを持ちながら方向づけていこうとしている。

「パネルディスカッション」

●発言の中から：

- * どんどん変わっていく社会のなかで、まちが生きものであるだけに本物を見極めるといえるか？景観とは何ぞやを考えるのが難しいときであろう！
- * 自分たちの住んでいる街は、こういう景観が大事なんだという一つのコンセンサスづくりをまずやるべきだろう！
- * 地域づくりはあくまで住民の盛り上がりが必要でなければ成立しない、その時その時の社会情勢に応じて行政がうまく舵取りをしていくこと。その場合は、そこに住んでいる人の総意で決めていく必要がある。
- * やはり、何を考えていく場合でも価値観の違いといったものがある、できるだけ価値観をある程度一致させていく、この辺が大きな問題である。
- * 景観というものは五十年や百年という長いスパンでもって評価されるものだと思う。
- * 今日の景観は視覚的な目で見られることが多いのじゃないか？自然が大切か、建物が大切かといったものは、人間が生きている場合においては建物も自然も大切なのである。その両方をどうトータルして生活していくか。人間も大自然の生きものだという観点から環境を全体的に捉えていかなければ問題がある

のじゃないだろうか。

* 景観は統一化されたデザインの美しさもあるが、逆に考えれば制限され面白みに欠けるという部分もある。日本のようにゴチャゴチャした東洋文化の中にも、子供たちに夢を与えるべき景観・地域はそれぞれの地域にあった地域デザイン創造があるのじゃないか。

* 生活している人間の匂い、生活の匂いにするものでなくては、そこに定着しない、とって付けたようなものでは定着しない。浮き上がるだけである。

* 景観というのは、時と共に人の価値観も変わり、その時非常にいいなと思って十年後、百年後ではわからないという部分があるのではないだろうか。

だから、そこに住む人たちの心・気持ち



というものが一番大切にされなければならないのじゃないだろうか。

* 景観には経済的阻害に加えて、田舎では人情的阻害といった問題もあるのではないか。

* 五感の覚醒をしながら景観論を論じることが大切である。

* まちづくりの視点の中に一人一人がよい町を造っていかうとする気持ち、景観は地域の共有財産であることの認識。

●おわりに

四時間に及ぶ議論ではあったが、お互いが日頃考えていることを、また、それぞれの景観論を話したり聴いたりする場に成り得たと思う。

『景観』は非常に難しい問題ではあるけれど、机上論でも地域から離れたものでもなく、それぞれの地域での暮らしが景観であるう、生活している一人一人が少しでも住みやすい、少しでもきれいな街にするためにどうすればよいか…という意識を多くの人が持つことであろう。

あたたかい心で次世代の子供たちに少しでもいい故郷(まち)を…。

『90えひめ地域づくり活動者集会 報告』

フォーラムⅣ

「女性の世界が広がる」

「住みよい地域づくりを…」

まちづくり総合センター 豊田 渉

♥女性の世界が広がる

このところマドンナ旋風とかセクシャルハラスメントなどと女性に対する話題は多くなってきた。

時代は確実に変わりつつあり、女性が進出していることと表れでもあろう。このことは、女性の世界が広がっていく中に、住みよい地域をつくっていくキーポイントが隠されているからではないだろうか。それよりも、男性が徐々に押され気味になってきていることの方を懸念しなければならぬのではないかと思う。

十年程前にお隣の中華人民共和国を訪れた時、「おやっ!」という光景を目にした。町の中を走っているバス・トラックの運転をしている女性が多かったことだ。中国の人が言っていた「天の半分は女性が支える」という言葉を思い

出す。日本で、女性運転手は珍しいが、中国では当たり前だった。このことは、ただ国状が違うということだけではないような気がする。

♥フォーラムから

◆基調講演

立川 百恵さん◆

戦後、物の無い時代から世界でも有数の経済大国となった日本。近年、経済優先から生活優先の社会へと方向が打ち出されている。つまり、暮らしを大事にする、見詰め直す機会が増えているようだ。女性は、たとえ仕事を持っても「忙しい!」の一言で、生活を他人に押しつけて逃げるわけにはいかない。生活者という立場では横社会の関係で、対等・平等での相互援助と協力が必要になってくる。そんな関係の中から、生活

条件を良くしようとする共通の問題に立ち向かってきた。

「良い暮らし」というものは、地域と無関係に一人で獲得できるものではないと思うし、人間らしい暮らし」とは、自分たちが、やりたいと思うことを、いろんな形で積み上げていく営みが、地域の中でいっぱいできることではないかと思う。

◆話題提供

河畠 登紀さん◆

地域づくりに関わり始めたころ、特別なことのように感じていたが、普通の人々が当たり前の毎日の暮らしの中で、地域にこだわりの役割を見付けてやっていくことだと思えるようになった。小田川にこだわって、いろいろな「もの」「水」が観えてきた。その小田川へ、私たちの家庭から生活排水が流れこんでいる事実。地域環境の問題もコップ一杯の水から。本当に美しいものを目でなく心で観れるように、「自分づくり」をやっていききたい。

◆話題提供

片山 恵子さん◆

無農薬、無化学肥料で、よりよいみかんづくりを目指した無茶々園の中で「なんな会」は、家庭から、それを支える女の集まりで、五人で発足して六年になる。

環境、公害問題を考えつつ、より安全な食物を求め、心豊かな生活がおくれるよう、そして、女性の地位が低いと言われる田舎が、「面白くなるよう」仲間と考え、行動していききたい。自分たちが本当にしたいことを、本当に良いと思うことをやっていけば、それが



地域づくりになっているし、活気もわいてくる。今は自分たちから少しづつあせらずに広がらせながらやっている途中。

◆話題提供

黒瀬 久美子さん◆

大正零の発表会をするに際して、いろんな人に関わり、お世話になった。同じことをまた同じメンバーでできるかどうかという、多分できない。次に何かをする時には、新しいメンバーで新しいことをしようと思う。刺激し合うことは、大事だと思うから。

よく「楽あれば苦あり」と言うけれど、私は「苦の裏に楽あり」と思う。苦しいとかしんどいとか言っている、絶対どこかに楽しみ方というのがあるはず。これからも、楽しい方を見て生きていきたい。

♥それぞれの意見から

◎本当の地域づくりは「自分自身だ」と思った。自分から行政をつつかないと火花は上がらない。常に自分自身を見回して問題意識

を持つこと。更に、年令を意識せずに頑張っていきたい。

◎特にいま、女性から見た目が必要じゃないか。うちの町でも、女性頑張ってきて、私がついていきにくくなってきている。ひょっとしたら、日本の将来を変える一つの力になるんじゃないかと感じている。

◎自治体といいながらも、行政主導の地域づくり、むらづくりには疑問をもっている。しかし、パーソナリティー豊かな方々が自ら働

きかけて、行政を誘導、利用されている姿勢に敬意を表したい。

◎女性ができる小さなことから大きな輪が広がるのではないかと、いうことで、海を綺麗にするため、月に一回の浜そうじや合成洗剤を使わない運動をしている。今日は、夫婦で参加しているので、帰ったら二人で話ができと思う。

◎長寿社会をうまくまとめて前進するためにも、シニアネットワークの形成が必要だと思う。

◎いろいろな理由からリゾートはすすめられているが、自然を大切にしながら生活を求める点からの住民主体の行動が生まれて多角的な考え方ができるようにしたい。◎エコロジーの問題は、未来の尺度で現在を考えていかないといけないと思う。

◎技とか環境など含めて、「昔は良かったではなく、今はよくなったぜ」というような地域にしていきたいし、自分の周りを変えていきたいなと思う。

◎将来、いっぱいリゾート構想ができて、自然を残していれば逆に自然を求めてやってくる人が増

えてくるかもしれない。

◎「となりのトトロ」が住んでいるような町に住んでみたいし、そんな町になればいいと思う。

◎四人の皆さんに共通しているのは、いろんなことに興味を持っているなあということ。「これっ」といって与えられた生活じゃなくて、自分自身の生活をいろんな面で楽しんでいる。狭く自分を限らない生活をしているなあ。リミットしていないなあという気がした。

♥自分の世界を広げる

四時間近くにわたって、いろいろな質問や意見が飛び出し世界が大きく広がった。その全てをここでお伝えすることはできないし、会場で話したことが全てでもないと思う。

女性の世界に限らず、自分の世界を広げるということで、一番考えなくてはいけないのは、こういった機会を利用して参加することが前提になることは言うまでもないことだと思う。それが第一歩であり、それがなければ、どんな世界も広がらないだろう。



「舞たうんに寄せる」

久万町 宇都宮栄一

今頭の中にあることといえば「地域デザイン」「自治体CI」「地域計画づくり」「農村景観」「観光?…テーマパーク」「春が来た。さあ遊びイベントの仕込みをしなくちゃ!」などなど文書として整理がつかなく西へー。じぐらいもらえろと何とかしぼって書けるじゃないかと言いつつ考えている次第です。

今日は、近所の親類の結婚式があるということで消防団の防火訓練をさぼって久しぶりの休日ではーとして『舞たうん』を目的なく開いていますと、随分の人達の思いや、活動が文章となって載せられており、今回で十六号ですか?改めて『舞たうん』を通じて、(財)まちづくりセンターや、研究会などの活動の足跡をみた思いです。私もこの情報誌の初回からの編集員の一人だったのですが、『舞たうん』という名前をつける時、『地域に根をおろさなくて、舞い上がってしまいそうでイメー

ジ的にどうかな」という意見もありましたが、この頃、初対面の方から、「『舞たうん』に載ってたでしょう。あの…」という話題を聞いて、愛媛に風を起こし、地域の人達のマイタウンで演舞するためのネットワーク誌になってきたかなと喜んでいました。

今までは、色々な方々の掘り起こしの意味で事例的情報や会議報告が多かったと思いますが、今後の一方向として、テーマを絞った開設塾の座談情報などにも力を入れればグッと読み物としてレベルアップし、売れるんじゃないかなあ…。

すべてはここから

小田町 影野由美子

昨年の十一月から、まちづくり総合センターのご配慮により「ふるさとコンサルティング事業」を小田町で行うことになり、三人のアドバイザーの先生方は、そのまちづくり研究会(さなぎ会)の中でまちづくりなんてものは、自分

のためにする。自分がおもしろくてやりたいことをすればいい。と言われました。でも自分のやりたいこと?そんな事言っちゃって…。

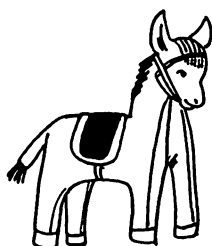
でも本当は、そんな発想を持つことが、結局は、町づくり、村おこしにつながって行くのではないのでしょうか。「すべてはここから」自分から始まるのではないかと思っています。

実際には自分もこんなことを毎日考えながら、青年団とか、さなぎ会に参加している訳ではありません。しかし、近ごろは少しでもこういったことを考えて、自分たちがどうにかしなければならぬと思う若者が減ってきたことは、寂しいことです。

青年団!そんな田舎者の団体なんか…。まちづくり!何も自分がしなくても誰かがしてくれる、そんな人たちが多くなったのです。私たちが今やらなければ!そんな危機感をもっと多くの人に感じてほしいと思います。

そして、小田町では、そんな気持ちを持った者約二〇名が、さなぎ会として生まれました。

月一回の定例会を行いながら、さなぎから蝶になろうとしている訳ですが、今度その第一歩として小田川の源流を探しに行くことになりました。



五十崎の方では、スイスと川の交流をされ、小田川を通して快適な環境をさらに創造し川を通じた交流を全国に広めようと言われていたのですから、地元である私たちさなぎ会が、小田川の源流を見つけたしたい、と思ったのが始まりです。

まちづくりというテーマは永遠につづくテーマだと思ふし、今の私たちには何も出来ないかもしれない。

しかし、では自分から、ここからという気持ちを持てないで私は自分の故郷に貢献したいと思っています。

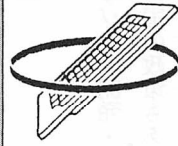
TOWN タウン

パソコン通信ネットワーク

広げましょう ヒューマン ネットワーク

Vol. 10

Human Communication & Network



ECCC

Ehime
Computer
Communication
Club

えひめコンピュータコミュニケーションクラブ

又か!!と思われる方もおありでしょうが、今回は入門編のパソコン/ワープロ通信です。

◆まず、電話回線が必要です。注意しなければならぬのは、「四針のモジュラー」になっていないといけない事です。プラスチックで技き差し自在になっているものです。今後、キャプテンやホームセキュリタリーの利用等で益々利用されるものですから、まだの方はもよりのNTTへ連絡して工事をしてもらおうと良いでしょう。

◆次に、パソコンかワープロのどちらが必要ですか。既にパソコンを持っておられる場合はそのまま使われるのが最良ですが、まったくこれからという時には、他の必

要(データベース作成等)がない限りワープロの方が安上がりです。但し、通信中文字が上から下へ流れますから、画面はパソコンと同じ四〇×二〇以上の文字表示が見やすく、コミュニケーションの為に文章を作成する時にも有利です。又、漢字まじり文(変換する能力は、まだまだの感がありますが、それでもあまり安いものや古いものはさらに能力に限りがあり充分な利用が出来ません。

◆「モデム」これも必須アイテムです。パソコンやワープロの中には標準で付属しているものもありますが、なければ新たに購入する必要があります。

通信実行時にやりとりするスピードは、三〇〇・一二〇〇・二四〇

〇等があります。

現在、一二〇〇ボーと二四〇〇ボーの移行期にあり、どのスピードを選択するか難しい時期です。

予算があれば、(意味はわからなくても)二四〇〇ボーでMNPクラス五対応のものとお店で言うて下さい。でも最初は設定が簡単で、価格も下がってきた一二〇〇ボーがおすすすめです。

又、遠距離(東京等)のホストへのアクセスを予定されている方もパケット通信や地方のアクセスポイント(ホストが東京にあっても松山にアクセスする所がある)もありますから、先方のホストがこれらに対応していれば、一二〇〇ボーでも充分です。

◆忘れちゃいけない電話代!

よく、大変な金額の話しが紹介されていますが、松山市内の方がTOWNタウンを利用されるのであれば、熱心なマネージャーさんの例でも、六〇〇〇〜七〇〇〇円位ですから、普通は三〇〇〇円位増えると考えれば充分です。

くれぐれもオンライン上(接続したまま)書き込んだり、そのまま文章をじっくりと読むというのは、NTTを喜ばすだけです。避けられた方がよいでしょう。

前者にはアップロード、後者にはダウンロードという手段が有効です。

◆ワープロで、通信対応のものには最初から通信ソフトがついて来ますが、パソコンでは通信ソフトも必要です。

各社から色々なソフトがでているので目移りしそうですが、近くにいる人で既に使っている人がいれば、それに合わせて購入して教えてもらうのが得策です。

又、PDSにも優秀なソフトがありますから、近くに通信をしている人がいれば、ダウンロードしてもらって作ってみるのもよい方法です。但しPDSは、ただデータのソフトではないのです。作者へのお礼やPDSのレポートなどをエチケットとしてお忘れなく。

平成2年度

事業計画

- H.2.4.1 ~ H.3.3.31 -

(財)愛媛県まちづくり総合センター

(財)愛媛県まち

づくり総合セン

ターは、各地の

地域づくり活動

をお手伝いする

立場から、'90年

代を二十一世紀

創造の『個性が

光る／本物求め

の時代』と想定

して、地域ごと

に『より人間ら

しい(生活文化)

暮らし』を希う

…、息の長い地

域づくり活動の

土壌が培われる

ことを目指し、

この事業計画を

定めます。

なお、事業の

展開は「地域づ

くりは人なり」

の原点と、「地域

のことは地域に学べ」の原則を踏まえて、有志活動者の方々のネットワークキングをベースとしながら、柔軟な試行錯誤によるローリング方式で実施します。

一、現状の理解と主要課題

平成の時代を迎え、ここ一年の地域づくり活動は、景観・デザイン・アート・アメニティー等々、美しい生活環境を求める…、住民活動や創造を愉しむ…、文化活動とともに、暮らしを遊ぶ…、新しい地域イベント等が盛んとなり、新時代のライフスタイルを示しはじめたようです。

また一方、リゾート開発・ふるさと創生等の国の政策もあつて、県や市町村はもとより、各種の地域団体・機関、マスコミ、

民間企業等々、ほとんどの社会的活動が「地域づくり」を標榜するようになり、地域の人びとの関心が急速に高まって、各地で地域の新たなブランドデザインや地域づくり／未来路線を模索する…、新たな動きも生まれてきました。

こうした動向は、これまでセンターが仮説してきた「新時代の予測」を裏づけるものでして、新しい時代の流れは、これからの地域づくり活動の方向として、『より人間らしい暮らし(生活文化)の充実』と『共生と連帯の社会(ホロニック社会)づくり』への期待を、ますます強めてゆくものと思います。

けれども、ここ当分は、地域の人たちの価値観の多様化とあいまって、情報化・国際化・高齢化等々、時流を象徴するキーワードの独り歩きや、多彩な行

事型地域活動がラッシュ化する向きもあつて、「地域づくり／本物求め路線」を見失う恐れもあり、その吟味が難しくなるでしょう。

そこで、センター当面の主要課題は、地域活動のオビニオン・リーダーである有志活動者のネットワークキングをベースとして、地道な『地域づくり／本物求め路線』の実践的な吟味活動と、地域の人たちが地域の自立を目指し、自ら考え自ら行う『地域の内発態勢(地域活動プロデュース機能)づくり』の支援活動であると考え、これらの事業を重点に着実な積み上げを進めます。

二、基本的な考え方

当面のセンターの事業は、その基本的な考え方として、「望ましい地域づくり活動」を次の

通り描き、これをメルクマールに展開してゆきます。

地域づくり活動とは……、

I 地域の人びとが、『より人間らしい(生活文化)暮らし』希い、

II 身の回りの『生活自治』を原点として行う活動であって、創造』をテーマとした「住民活動」と、

IV 住民自治をベース『地域経営』を進める「自治体行政」が、

V 協働して『地域自立』を目指す、『共生と連帯』の活動と考えます。

三、モットー

『地域の元気はくらしの元気、くらしの元気は地域の元気…』

四、方針

(一) 「地域づくり／本物求め路線」の実践的な吟味活動を集積します。

個性が光る／本物求めの時代を生きる…、より人間らしい(生活文化)暮らしの視点から、これからの「地域生活の創造」を目指す地域づくりの基本的なあり方を、現実の地域活動の吟味を通じて求めてゆく…、有志活動者のコンセプト・ワークおこしを進め、その集積をはかります。

(二) 地域自立を目指す「地域の内発態勢づくり」を重点に支援します。

自分のことは自分です…、生活自治が原点の地域づくり活動にとって、当面一番の課題は、より人間らしい暮らしを求める…住民活動と、地域

自立を目指すし地域経営を進める…自治体行政が協働できる、『地域の内発態勢(地域活動プロデュース機能)づくり』と考え、その支援活動を進めます。

(三) 『交流と創造』を生むコミュニケーション型情報活動を充実します。

本音の話しは共感を呼び、共感が行動を呼ぶ…、地域づくり活動の原則を踏まえて、「ヒトの想い」がこもる情報サービスのシーズに、その情報の共有から新たな交流と創造を生み出してゆくことを期待して、『コミュニケーション型情報活動』の展開を工夫し努力してゆきます。

五、事業

(一) 「地域づくり／本物求め路

線」の実践的な吟味活動

有志活動者の開かれたネットワーキング・システム「えひめ地域づくり研究会議」の研究活動を中心として、各地の地域活動のナマの問題を掘り起こすとともに、マクロな視点と時代予測を踏まえた『地域づくり／本物路線』研究吟味を行い、有志活動者の方々の検討に供します。

(1) 仮称／地域づくり研究サロンの開設

時々の地域活動の課題を「事例話題」として、マクロな視点と時代予測を踏まえ、専門家等の助言を受けながら「地域づくり／本物路線」を吟味する…、地域の有志活動者を中心メンバーとした、開かれた柔らかない『仮称／地域づくり研究サロン』を継続的に開設します。

(2) ミニシンポ／課題別研究
集会の開催

地域の有志活動者が、地域活動の「本物求め」の主要課題を掲げ、より専門的に研究する勉強会を計画して手を挙げれば、その地域で事例研究を希望する各地の有志活動者も参加できる
…、「この指とまれ方式」の実践的な『課題別／ミニシンポジウム』を開催します。

(3) 仮称／ブロック別地域問題
研究集会の開催

「地域づくり活動／本物求め路線」の吟味をテーマに、各地域の活動現場のナマの問題を出し合い確かめ合うとともに、他地域・異業種の問題を自分のこととして受け止める…仲間意識を高め、広域生活圏ネットワークキングおこしの『プロッ

ク別活動者集会』を行います。

(二) 地域自立を目指す「地域の
内発態勢づくり」の支援

県など四者協働の「ふるさとコンサルティング事業」を中心し、実施地域に密着した『内発的な地域活動プロデュース態勢づくり』の支援を行うとともに、その実践事例を基に、女性や若い人たちのヤル気おこしを考えた、息の長い地域活動の土壌づくりを支援する活動を進めます。

(1) 地域づくり助言活動システム事業の実施

県の委託事業「ふるさとコンサルティング事業」との協働事業として、地域自立を目指して頑張る地域の有志活動者を対象に、先進地域の実践者等の『助言グループ』を継続的に派遣し、地域問題の実践的研究活動

を行い、地域活動のプロデュース機能づくりを支援します。

(2) 地域づくり先進地交流研修ツアーの派遣

新時代の地域活動を担う、若い活動者たちの新たなヤル気おこしを希い、一市町村／行政一人・民間二人の五市町村で編成する研修グループを…、異文化的ギャップがあり、高いレベルの実践者と濃密に交流できる先進地域を選んで派遣する『交流研修ツアー』を行います。

(3) 仮称／地域の内発態勢づくり研究集会の開催

組織を作らない組織活動、地域活動プロデュース機能をもって、「地域の内発態勢づくり」を目指す…、「地域づくり助言活動シス

テム事業」の実施地域の研究発表を中心に、新しい地域活動の戦略・戦術やノウハウ等の開発と集積を行う『交流研究集会』を開きます。

(三)

「交流と創造」を生むコミュニケーション型情報活動

各地の有志活動者が相互に交流し融合する中から、独自の活動を生み出してゆく…、「きずな」づくりとしての情報サービスを重点に進めるとともに、個別的な情報需要には、地域活動のプロデュースを支援するナビゲーション方式の情報提供を行い、リアクションを期待します。

(1) 個別需要に対する情報サービス

面談・電話・FAX・手紙等の個別的な情報需要に短時間で適切に応えるため、

集積してきた情報の整理・加工等に努めると共に、情報需要の把握と新規情報の収集を行い、情報センター機能を整えます。

(2) 地域活動者向け情報サービス
の拡充

① 機関誌『舞たうん』の
充実

「えひめ地域づくり研究会
会議」と共刊の『舞たう
ん』を、地域の活動者が、
常時ネットワーキングし
てゆく機関誌を目指し、
活動者相互が交流し融合
して、独自のものを発掘
する場としてゆきます。

② イベント情報誌『えひ
めイベントBOX』の充
実

県内地域イベントの総
合的な紹介誌として、

「愛媛県市町村振興協会
と共刊している『えひめ
イベントBOX』に、地
域イベントのあり方や専
門的方法等の記事を加え、
実践者向けに充実します。

③ 主要資料の刊行物化と
活用

ミニ・シンポ／課題別
研究集会、先進地交流研
修ツアー等、センターの
各種事業に伴う諸資料を
はじめ、全国レベルの主
要資料等を刊行物とする
ように努め、地域活動者
の利用に供します。

(3) その他の情報サービスの
整備

① パソコン通信ネットワー
キングの実用実験

新しい情報メディア
「コミュニケーション型

パソコン通信」を、地域
づくり活動に活用する実
用実験活動を、「えひめ・
コンピュータ・コミュニ
ケーション・クラブ」と
の協働事業で継続します。

② 貸し出し用／地域づく
り研修ビデオ等の整備

「先進地域活動」等の
ビデオや、「専門講師等
の講演」録音テープ等を
順次整備し、地域活動者
が容易に活用できるよう
に充実してゆきます。

六、事業実施のベース

(一) 各事業の実施は、“地域の
ことは地域に学べ…”の原則
を踏まえて、地域の有志活動
者の人たちとの協議を基に計
画します。

(二) 各事業の実施は、人びとの
“知恵と元気”の源泉である…
“参加の自由”を原則として、
総て「この指とまれ方式」に
よって行います。

(三) 各事業の実施は、“ボラン
ティア”の原則、自発主義・
自前主義・無償主義の精神を
もって運営するよう努力しま
す。



ミニ・シンポジウム

『市町村の振興基本計画を考える』報告書が、できました!!

1989年8月26・27日に久万町にて開催しましたミニ・シンポジウム『市町村の振興基本計画を考える…』報告書が、久万町・主催者関係有志の手により作成されました。

このシンポジウムは、地域づくりの指針である市町村の基本構想や振興計画の策定について、現状を振り返りながら、その「あり方」と「地域づくりを考えよう」としたものです。

また、県内58町村の企画担当の方々より「基本計画の策定に関する実態調査」のアンケートにお答えいただき、その調査結果と分析についても参考資料とさせていただきます。

この報告書には、東京大学の大森彌教授と島根県吉田村・鉄の歴史村地域振興事業団専務理事／藤原洋氏の講演内容をはじめ、久万町からの提言、アンケートを通じての課題提言などを収録しております。

それぞれの市町村で地域づくりや企画事務・事業に携われる方々にご活用いただければ幸いと存じまして、ご案内申し上げます。

※ 報告書をご希望の方は、下記の編集事務局までご連絡下さい。

頒布価格は1冊1,300円です。

〔発 行〕上浮穴郡久万町・勸愛媛県市町村振興協会

勸愛媛県まちづくり総合センター・えひめ地域づくり研究会議

〔お申込先〕〒790 松山市道後一万1-2

勸愛媛県まちづくり総合センター内

えひめ地域づくり研究会議

T E L . 0899 - 25 - 5557 F A X . 0899 - 25 - 6680

ふと…

風に誘われてふりむけば、木々の間からこぼれおちる光の帯は、しだいに色とりどりの暖かさを増し、笑顔でいっぱい空は、天と地の限りまでも広がっています。

あなたは今、何をして、何を考えているのでしょうか。

朝夕に、ひとり静かに物思うとき、このひとときを大切に生きてゆきたいと思うこのごろです――

内容についてのご意見や活動内容についての記事など気楽に寄せ下さい。

「舞・たうん」編集係

二人の M s . (丹下・久保田)

まで。

〒七九〇 松山市道後一万一の二

勸愛媛県まちづくり

総合センター

T E L

〇八九九(二五)五五五七

F A X

〇八九九(二五)六六八〇